

トップインタビュー特別プラン

特別料金

通常料金：2,000,000円（税別）⇒

1,500,000円（税別・制作費込み）

- ▶ 日経 xTECH Special（タイアップサイト）制作（A4サイズ2ページ（約2,400文字）相当）
- ▶ 日経 xTECHからの誘導（基本パッケージ）



日経 xTECH

月間 PV : 20,120,330
月間 UB : 4,018,723
(2018年5月時点)

誘導 ▾

- ・ピックアップコンテンツ／インフィード広告
- ・メールマガジン 2 行お知らせ
- ・タイアップ一覧

12/25
～1ヶ月掲載

日経 xTECH Special

先駆者達のクロス領域
製造業の IoT 化を
独自プラットフォームで
全面サポートする
ABC テクノロジー
代表取締役社長
日経 太郎氏

通信や産業・計測などの分野に向けた、高性能アナログ半導体を中心とするソリューションで
強みを持つ。日本では、オートモーティブの領域でも着実に実績を積んでいます。また、産業、
ヘルスケアなどの領域で加速する IoT 活用の動きに応える準備にも余念がない。同社 代表取
締役社長の馬連氏に、2016年の事業状況と 2017 年以降の展望、注力点を聞いた。

—2016 年はどのような年でしたか。
馬連 2016 年度のワールドワイドでの売り上げは、前年度比で横ばいでした。ADI では、「オートモーティブ」「ヘルスケア」「コンシューマー」「インダストリー」「通信」のセグメントに注力しています。近年市場競争に注力してきたオートモーティブの新規受注が順調で、2020 年以降に向けた希望が高まっています。日本ではこの分野は 2 ヶタ成長となり、成長軌道に乗ったと感じています。元々はエアバッグ向けの加速度センサーから参入した市場ですが、今はハイブリッド車や電気自動車のパワートレイン用での電力管理などを主力としています。ヘルスケアも好調でした。医療画像処理装置市は日本企業がリードしており、お客様の成長に貢献すべく、特徴のある製品を開発しています。

一方、通信セグメントの需要は伸びませんでした。日本では、携帯電話の基地局などに向けた製品が、設備投資の減退の影響を受けました。同じ通商環境でも米通商部の設備投資は順調で、データセンターの増強にかかる投資も健闘しています。この傾向は 2017 年も続く見込みです。インダストリーは、中国での設備投資抑制の影響で、2016 年春までは製造品の売り上げが落ちました。現在は回復しています。

—オートモーティブでは、応用で広がっているのですね。
馬連 ADI では、オートモーティブの市場に向けて、クルマに新たな価値をもたらす技術や製品を積極的に投入

さらにお得な付帯プランもご用意

プラン A

+2,500,000円（税別・制作費込み）

- ▶ 日経ビジネスオンラインからの追加誘導（1ヶ月）
- ▶ 日経ビジネス2018年12/24号（12/21（金）発売）へ転載（4C2P）



日経ビジネス

記事体広告（4C2P）
通常料金 : 5,640,000円（税別）

日経ビジネス

タイアップサイト
通常料金 : 3,500,000円（税別）

日経エレクトロニクス

Sources of innovation
NIKKEI ELECTRONICS
記事体広告（4C2P）
通常料金 : 2,712,000円（税別）

日経ものづくり

記事体広告（4C2P）
通常料金 : 1,988,000円（税別）

日経Automotive

記事体広告（4C2P）
通常料金 : 1,760,000円（税別）

申込締切：10/19（金）取材：10/31（水）頃まで 校了：12/19（水）

※広告料金は、取材・制作費が含まれます。識者・著名人を起用する場合には別途出演費・コーディネート費、出張が必要な際には遠方取材費がかかります。

※広告料金には、別途消費税が加算されます。※インタビューの掲載順は①掲載ページの多い順②ABC順となりますので、ご了承ください。

日経BP社
Nikkei Business Publications, Inc.

〒105-8308 東京都港区虎ノ門 4-3-12
Email ad-dk@nikkeibp.co.jp

技術メディア広告部 ☎03-6811-8021
経営メディア広告部 ☎03-6811-8031

日経 xTECH 元年 特別トップインタビュー

産業の革新はクロス領域で起こる

2018年2月13日、日経 xTECHは
日経テクノロジーオンライン、ITpro、建築・土木の
専門Webの発展的な統合により誕生しました。

これを記念し年末年始恒例で実施してきた

トップインタビュー企画も一新。

ビジネスとテクノロジーの
クロス領域における革新に着目します。

貴社が推進する最前線の戦略を
打ち出せる機会として、
ぜひご活用ください。

日経 xTECH

産業が再定義される時代の 最前線の技術に迫る

経営トップに訊く、 テクノロジーが起こす 産業の変革

貴社が携わるビジネス×テクノロジーのクロス領域で起こる革新を見出しに掲載。トップインタビューまたは対談を通して、ステークホルダーに対して効果的に情報をお伝えします。

インタビュー形式

貴社のビジョンや事業戦略、強みなどに関する質問に答える、経営トップに自らお答えいただきます。

対談形式

お客様やビジネスパートナー、著名人などと経営トップが交わす対談をまとめ、企業の優位性や将来性、競争力をアピールいたします。

※識者・著名人を起用する場合には別途出演費・コーディネート費がかかります。

日経 xTECH は、 すべての技術者に 変革の最前線を届ける 技術情報メディアです

日経 xTECH は、IT、電子・機械、建築・土木、自動車など、さまざまな産業に携わる技術者やビジネスリーダーに向けた技術情報メディアとして誕生しました。登録会員数は二百数十万人。専門記者120人以上の取材力や人的ネットワークなどの総力を結集することで、あらゆる先端動向や先進技術を横断的に届けるコンテンツを提供します。

2019年以降も注目が期待されるトピックス



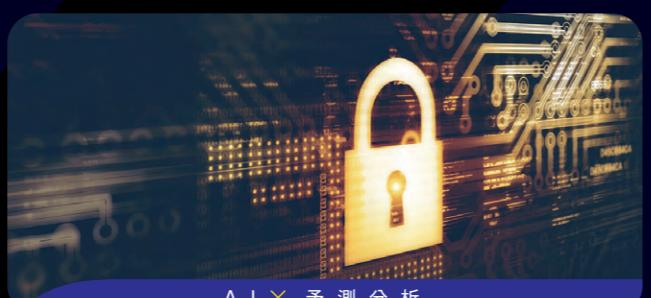
デジタルものづくり

インダストリー4.0以降、ものづくりの生産性向上や暗黙知の継承にはICTの活用が不可避という認識は限りなく浸透しました。ITからOTまでのあらゆるものを“つなげる”ことを共通認識に、どの企業がどの分野までを着手し、主権を握っていくか。理念の段階を超えた実装に向けての競争が始まっています。



クリーンエネルギー

サステナブルな社会を実現するうえで、再生可能なクリーンエネルギーは欠かせません。環境や気候に影響される風力、太陽光発電などに代わり、電力システムに革新をもたらす新素材の開発が待たれる一方で、風力や太陽光発電の効率化に貢献する素材の継続的な開発・研究も求められています。



サイバーセキュリティ

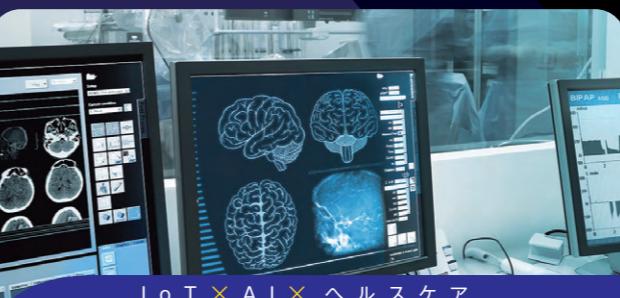
IoTやサプライチェーン構築は、同時にサイバー攻撃の脅威を増幅させています。そこでいま注目されているのが、従来型の“守りのセキュリティ”とともに、機械学習やビッグデータを活用した“攻めのセキュリティ”的活用。加速するビジネスの中で組織のインシデント対応強化は喫緊の課題です。

対象業種：エレクトロニクス、アナログ、通信、電子デバイス、電子設計、電子製品、5G、IoT技術、ものづくり、設計革新、生産革新、産業機器／部材、製造スキルアップ、マネジメント、新産業、航空・宇宙、ロボット、クルマ、自動運転、車載部品、電動化、エネルギー、パワーエレクトロニクス、メガソーラー、デジタルヘルス、エンターテインメント、ネットワーク、ITセキュリティ、モバイル&PC、ソフト開発、ITキャリアアップ、建築・住宅、土木etc.



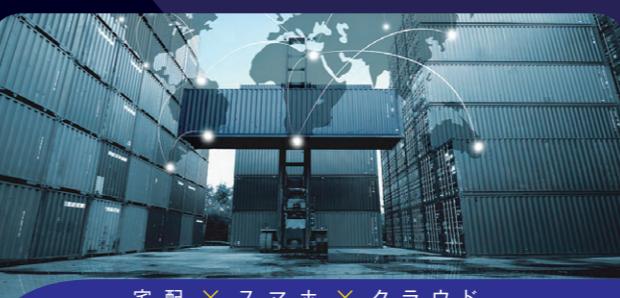
コネクテッドカー

100年に一度の大変革期にある自動車業界。モビリティの姿を再定義するうえで、データトラフィックの増大は必至です。2019年後半より始まる5Gの商用化は、ネットワークシステムの大容量・低コスト化へ大きく貢献する可能性を秘めています。



ヘルステック

2025年問題や超少子高齢化社会が間近に迫る中、AIを駆使した疾患解析、3Dプリンターによる心臓モデル制作、ウェアラブル装置を活用した生体情報の一元管理など、テクノロジーを応用した革新的ソリューション、サービスの確立は必至。新たなビジネスモデルの誕生が期待されます。



ロジティック

ラストワンマイルの課題が浮き彫りになり、いっそうの効率化や付加価値の向上が求められています。テクノロジーを駆使した現場革新とともに、オムニチャネル化などサプライチェーン統合や、共同配送などのスケールによる効率の追求など構造変革の動きも目立ちます。



エッジコンピューティング

膨大な情報の処理において、伝送の時間や消費電力の抑制ができるエッジは現場最適化において、同時に豊富な蓄積がある日本の強みでもあります。専用のAIウエハーが生産する大量のICチップはテクノロジーの主要トレンドに欠かせません。



i-Construction

CIMの導入をはじめ、ドローン測量の高精度3次元データ、AIによる経験の伝達など、建設現場におけるICT活用は、生産性向上を軸に推進されています。その中で生産プロセスにおけるビッグデータの取得や、クラウドプラットフォームを利用した新たな雇用の創出への期待も高まっています。



アグリテック

就業者不足が深刻化する中で、いかに低コストで効率的に収穫量を増やすことができるのか。自動走行トラクターやドローンなどによるリモートセンシング、環境データに対応して構成された水田の実現、生育予測によるゲノム編集など、スマート農業化による活性化が期待されています。